

知的障害のある人における障害認識と自己理解

和歌山大学教育学部 古井 克憲

和歌山大学教育学部附属特別支援学校 小畑伸五

和歌山大学教育学部 北岡 大輔

1. はじめに

本報告では、知的障害のある人における障害認識と自己理解について今後検討していくために必要な方策を提案する。日本では2007年、学校教育法改正によって、特別支援教育が開始された。2007年には、日本が国連障害者の権利条約に署名、2014年に批准するなど、これに伴い、2000年代以降、日本の障害者に関する制度政策は大きく変化しており、障害者差別解消法や障害者総合支援法が施行された。障害者の自己決定・自己選択の尊重及びそれに係る支援も、意思決定支援の必要性とともに、これまで以上に重視されている。このような中、知的障害のある人は、家庭や学校、職場、施設等からどのような影響を受け、それをどのように受け止め、自身の「障害」を認識しているのか、同時に「障害」と関連づけて、どのように自らを理解しているのか検討していく必要がある。近年、特別支援教育では、生徒自身が自らについて、そして自らの障害を理解すること、すなわち自己理解教育が行われている。自己決定・自己選択をするためには、自己認識や自己理解が必要である。歴史的にみて、知的障害のある人は、制限された環境で、周囲によるパターンリスティックな対応によって、自分のこと・自分の人生のことを自分で決められないということがあった。現在もそのような状況は続いており、社会環境の改善とともに、教育、福祉、医療といった領域を超え、支援者は、障害のある人本人の決定・選択を支えることを常に留意する必要がある。加えて、学校教育でも、障害のある人に対し、自らの障害認識や自己理解について教育し、エンパワーメントを目指すことが求められている。

2. 学校教育での自己理解教育

知的障害のある人の障害認識と自己理解については、学校教育での自己理解教育の成果が報告されている。武田ら(2021)によるとある特別支援学校(知的障害)高等部では、「セルフデザイン」(各教科等を合わせた指導として位置付けられている)が時間割に組み込まれ「他者とのよりよい関係を築くための基盤を整えること、その中での関わり合いを通して、他者と不安や悩みを共有できる環境を保障すること、その上で自己理解を促し、自尊感情を高めていけるような学習」が進められ、教育的成果があったと述べられている。

3. 知的障害のある人の視点からみた障害認識と自己理解について検討するための方策

上記のように、学校教育での知的障害のある人に対する自己理解教育が近年実施されるようになってきた。さらなる課題として、学校教育での自己理解教育が、生徒の卒業後にどのような影響を及ぼしているかにまで視野を広げ、学校教育での自己理解教育の成果や、卒業後の障害認識や自己理解について、知的障害のある人本人の視点から検討することが必要であると考えられる。このための方策の一つとして、卒業生への聞き取り調査が挙げられる。聞き取り調査を行う際には、生徒の教育歴に着目する必要がある。特別支援教育の開始や、学校での知的障害・発達障害の認知度の高まり、特別な教育的ニーズの必要な児童

生徒の増加に伴い、日本では「多様な学びの場の連続性」が重視されている。例えば、特別支援学校高等部入学に至るまでの教育歴は下記のもの挙げられる。

- ①特別支援学校小学部→特別支援学校中学部→特別支援学校高等部
- ②小学校特別支援学級→特別支援学校中学部→特別支援学校高等部
- ③小学校通常の学級→中学校特別支援学級→特別支援学校高等部
- ④小学校通常の学級→小学校特別支援学級→中学校特別支援学級→特別支援学校高等部
- ⑤小学校特別支援学級→中学校特別支援学級→特別支援学校高等部

さらに、特別支援学校高等部卒業後の進路先も下記のように例示できる。

- ①特別支援学校高等部→一般企業での障害者雇用による一般就労
- ②特別支援学校高等部→一般企業の特例子会社での障害者雇用による一般就労
- ③特別支援学校高等部→就労移行支援事業・就労継続支援事業・自立訓練事業
- ④特別支援学校高等部→生活介護事業

知的障害のある人の障害認識や自己理解については、知的障害の程度に大きく影響を受けるものの、上記のような教育歴や特別支援学校高等部卒業後の進路先に応じて、障害認識や自己理解が異なると考えられる。進路先の非障害者（健常者）の存在と、彼らと障害のある人との関わりが、障害のある本人の障害認識、自己理解に大きく影響を及ぼすからである。さらに、聞き取り調査では、ライフストーリー・インタビューを参考にすることが有効であると考えられる。ライフストーリー（桜井 2012）とは、調査協力者の人生に関する口述の物語であり、協力者の語りから、生活世界、社会や文化、その変動を明らかにしようとするものである。ライフストーリー・インタビューを行うことによって、知的障害のある人の障害認識と自己理解の生涯発達的变化を明らかにすることができ、この研究の成果は生涯を通じた支援に活用することにつながる。

4. おわりに

本稿では、今後、知的障害のある人の障害認識と自己理解を検討するための方策の一つとして、特別支援学校高等部卒業生を対象とし、教育歴や卒業後の進路先に着目し、ライフストーリー・インタビューを参考にした聞き取り調査を行うことを提案した。筆者らは現在、特別支援学校高等部から一般企業での障害者雇用による一般就労をした卒業生と、一般企業の特例子会社での障害者雇用による一般就労をした卒業生への聞き取り調査を実施しており、今後、これらの研究結果について公表していくことにしたい。

文献

伊藤佐奈美（2019）『軽度知的障害生徒における自己理解の支援に関する実証的研究』現代図書。

桜井厚（2012）『ライフストーリー論』弘文堂。

武田鉄郎・北岡大輔・辻岡麻起子・道上里砂・鶴岡尚子・小畑伸五・滝元あゆみ・中筋千晶・宮本太志（2021）「軽度の知的障害や発達障害のある生徒の内面を重視した指導法に関する研究（令和2年度）」『和歌山大学教育学部共同研究事業成果報告書 2020』117-121。